

F-SOAIPとは、多職種協働によるマイクロ・メゾ・マクロレベルの実践過程において、生活モデルの視点から、当事者ニーズや観察、支援の根拠、働きかけと当事者の反応等を「F (タイトル)」「S (利用者等の言葉)」「O (観察・多職種情報等)」「A (考えたこと)」「I (対応したこと)」「P (予定)」の項目で可視化し、PDCAサイクルに多面的効果を生むリフレクティブな経過記録の方法。

今回は、F-SOAIPの導入で記録を標準化したデイサービスの実践をお届けします。生産性向上で全事業所が求められる業務効率化だけでなく、根拠あるケアを評価するツールとして、人生の伴走支援の質を高める効果を実感しています。

## 課題を可視化し、根拠ある実践の好循環を生む 生産性向上の共通言語 F-SOAIP

リハビリ型デイサービス リハサロン祖師谷 施設長 河野礼子

### F-SOAIPとの衝撃的な出会い

「最期まで希望ある暮らしを続けた」という利用者の願いに応えたい一方、現場では本来できるはずの支援が実現できず、葛藤が続いていました。その中で出会ったユマニチュードとF-SOAIPは、私の職業観を大きく変えました。最初は聞き慣れない概念でしたが、困難な状況でこそ効果を発揮する方法であり、実践すれば未来を変えられる力があると確信しました。

### 介護の生産性向上とACP(人生会議)に不可欠なF-SOAIP

F-SOAIPの導入により、情報共有と業務効率化が大幅に向上しました。図1は、導入・定着のための教材です。

F-SOAIPは、厚生労働省の「介護分野の生産性向上プラットフォーム」でも紹介されており、記録の標準化が職員の意識改革にもつながります。支援現場では本人・家族・ケアマネジャー・事業所がそれぞれの立場から最適な環境を調整しますが、ACPを継続的に行うためには、F-SOAIPによ

る記録と振り返りが不可欠です(図1)。

### F-SOAIPへの転換の効果実感

叙述形式からF-SOAIPへ移行したことで、現場で頻発していた「思い違い」や「情報の齟齬」が大幅に減少しました。従来の自由記述は主語が曖昧で、読み手によって解釈が異なり、情報が活かされない悪循環が生じていました。F-SOAIPは項目ごとに情報が整理されるため、支援内容の評価や振り返りが容易になります。デイサービスでは30分の説明だけで職員が活用を始め、課題解決のスピードが向上しました。拒否や易怒性といった困難事例にも効果があり、ケアガイド化も視野に入っています。

### マイクロレベルの効果：利用者・家族との個別対応における好循環

マイクロレベルでは、情報があっても活用されない「悪循環」が課題でした(図2)。

叙述形式は長文で読み取りに時間がかかり、誰の発言か不明確なまま誤

解が生じることもありました。F-SOAIPを用いると、記録が整理され、本人・家族・支援者の共通課題が明確になります。ユマニチュードや緩和ケアなどの具体的支援も共有しやすく、ACPにおける意思決定支援の変遷も追えるようになります。事故報告でも視点の違いが可視化され、再発防止策の共有が迅速化します。記録は「書類作業」から「根拠あるケアを評価するツール」へと変化し、認知症改善や孤立防止などのアウトカム評価にも応用できます。

### メゾ・マクロレベルの効果の好循環

メゾ・マクロレベルでは、記録の標準化不足が多職種連携の妨げとなっていました。共有される情報と必要な情報の乖離が大きく、支援の理解や評価に差が生じていました(図3)。

### メゾレベル：事業所間・多職種多機関における好循環

F-SOAIPは専門性の違いを超えて共通言語として機能します。

- 個別課題から地域課題を分析し共有できる